

# クロタール 2 世及びダゴベルト 1 世の 統一王権とアウストラシア支配

---

徳 田 直 宏

## はじめに

614年、クロタール 2 世 (Chlothar II. 在位584–628年) によって発布されたパリ勅令をめぐり、史的解釈は、同勅令を王権に対する貴族権力の勝利として「メロヴィンガー朝のマグナカルタ」と評価する「通説」とそれを批判する説とにわかれ、いまだ定着していないとみなしなければならないのであろうか。<sup>1)</sup> 614年クロタール統一王権成立に貴族勢力が関与した事実はいわゆる「通説」も、またこれの批判者も等しく認めるところである。しかし問題点は王権が貴族権力を前に相対的に弱体化し、それに譲歩を余儀なくせざるをえなくなったかどうかというところにある。

ところで、筆者は前稿において、クロタール 2 世の統一支配権下における王権と貴族権力との問題をパリ勅令とパリ教会会議規定とにおける司教叙任規定の検討によって考察した。パリ勅令発布に先立って開催されたパリ教会会議は司教叙階権を首都司教 (metropolitanus) に、司教候補者選出権と首都司教とを含めた当該管区司教と当該教会ゲマインデ (聖職者及び信徒) に認め、王権に言及することなしに、シモニア及び権力の導入を排除することによって教会の自由 (libertas ecclesiae) を主張した。クロタールはこれに対抗するかのように、この問題をパリ勅令の冒頭の条項でとりあげ、叙階権のみを首都司教と、かならずしも同一管区に属さない司教とに認め、選出権を教会ゲマインデに限定して首都司教権の後退をはかり、一方では王権に司教の適格性審査権と宮廷人からの選出権を認めることにより、教会側の「自由」の主張に対抗した。貴族がこのパリ勅令の規定にどのようなかわりをもったのか、両規定から直接明確にしえないが、王が司教を世俗官吏と同一視し、政治的視角から司教叙任をとらえていたとするならば、王による司教の適格性審査権と宮廷からの選出権の所有は 7 世紀にフランク貴族の司教職進出志向が高ま

るだけに、王が貴族の司教職への進出を制する有効な手段を掌握したことを意味したのである。

本論では、「通説」批判論争が提起した問題を明らかにするもうひとつの手がかりを得るために、クロタールの統一王権成立にポジティブな役割を果たしたアウストラシア貴族と、同王及びその子ダゴベルト1世（Dagobert I. 在位623-638年）の統一王権との関係を考察することにした。まず、その際フランク国家におけるアウストラシア領域の変遷のあとづけから検討を始めたのは、グレゴールの「フランク史」及びフレデガールの「年代記」から読みとれるように、メロヴィンガー分国間の争いが多い場合、領域拡大問題に端を発しており、それが各分国王間の力関係によって決着をみたことは事実であるが、この領域争いに貴族がポジティブにかかわったとする根拠として、貴族が属する分国の領域拡大が自らの所領拡大に直接つながる可能性があったこと、また貴族がフランク国家全域に散在する所領<sup>3)</sup>を有し、その所領経営のために有利となるような分国支配領域設定に関与したこと、この2点があげられる。従って、われわれはアウストラシア領域の変遷をあとづけながら、統一王権と同貴族との関係を明らかにすることを試みることにした。

#### 注

- 1) 「通説」とその批判については、森 義信「メロヴィング王朝下のコメス・キーヴィターティス」 釧路工業高等専門学校紀要第9号 昭和50年9月、181-185頁参照。
- 2) 拙稿「クロタール2世の教会支配—メロヴィンガー・フランク前期における王権と司教叙任問題について—」 長谷川博隆編「ヨーロッパ—国家・中間権力・民衆—」名古屋大学西洋史論集—1、名古屋大学出版会 昭和60年9月、111-158頁。
- 3) 坂田正二「HISTORIA FRANCORUMにおける有力者の動向について」 竹内正三、坂田正二編「ローマから中世へ」 溪水社 昭和60年10月、150頁。

## I. アウストラシア分国

### 1) 613年までのアウストラシア分国の領域的変遷

まず、アウストラシア分国の領域的変遷について瞥見すば、同分国の領域は3つの旧ローマ・プロヴィンキアのprov. Belgica I (Trier)、prov. Germania I (Mainz) 及び同II (Köln) の全域とバーゼル (Basel)、ランス (Reims) 及びシャロン・s. マルヌ (Chalon-s.-Marne) の3都市とライン河右岸のフランク支配領域であり、それは511年の第1次分国時代のテウデリヒ1世 (Theuderich I. 在位511-534年) のランス分国の領域であった。<sup>1)</sup> ランス分国はこの東部フランキア地域のほかに、ロワール河以南のアキタニアでは、テウデリヒがクレルモン (Clermont)、ロデズ (Rodez) 及びアルビ (Albi) を獲得し、さらにその子テウデベルト1世 (Theudebert I. 在位534-548年) が対西ゴート戦を遂行

し、リモージュ (Limoges) 及びジャヴォルス (Javols) を占領して、東部アキタニアを領有した。そして、かれがブルグンドの諸都市オートン (Autun)、シャロン・s・ソーヌ (Chalon-s.-Saône)、ラングル (Langres)、ネヴェル (Nevers)、ブザンソン (Besançon)、アヴァンシュ (Avenches)、ヴィヴィエ (Viviers) そして、おそらくジッテン (Sitten) などを獲得したことにより、このランス分国のブルグンド領が同分国の本領とアキタニアの飛領とを結ぶ中広い紐帯を形成するところとなった。<sup>2)</sup>

このガリア東北部のランス分国は6世紀の後半になってアウストラシアの呼称をとるが、561年の第2次分国時代のジギベルト1世 (Sigibert I. 在位561-593年) の下では、フランキアの本領では、旧ランス分国領にラオン (Laon) が加えられたのみであるが、アキタニアに関しては、クレルモン、ロデズ、ジャヴォルス、ル・ピュイ (Le Puy) 及びヴィヴィエルの領有に限定され、その代償として、ウゼス (Uzès)、アヴィニヨン (Avignon)、エックス (Aix) の一部とマルセイユ (Marseille) を領有して、この地中海沿岸の港湾都市とアキタニアの飛領とを結ぶ回廊を形成した。<sup>4)</sup> 567年パリ分王カリベルト (Caribert. 在位561-567年) の死による同分国領の分割の結果、アウストラシア分国はモー (Meaux) のほか、パリの<sup>5)</sup>1/3、シャルトル (Chartres)、サンリス (Senlis) とレッソン・s・マツツのガウ (Gau Ressons-s.-Matz) のそれぞれ1/3、エタンブ (Étamps)、シャトーダン (Châteaudun) 及びヴァンドーム (Vendôme) の獲得によってランス分国の領域を更らに西方に伸ばし、同じ時期に同分国の領域に加えたメロヴィンガー王朝の聖地トゥール (Tours) 及びポワチェ (Poitiers) のひとつの完結的な領域と本領とを結合している。さらにエールーバイヨンヌ (Aire-Bayonne) とクーゼラン (Couserans) の2つの飛領及び旧アルビの獲得に成功している。<sup>6)</sup> このアキタニア及びプロヴァンスのカリベルトの遺産分割をめぐる3分国間の争いが6世紀後半の内乱の主な原因となるが、この問題はすでに拙稿で指摘したところである。<sup>7)</sup>

587年のアンデロー (Andelot) でブルグンド分国グントラムとアウストラシア分国王ヒルデベルト2世及びかれの母后ブルニヒルデ (Brunichilde) との間で結ばれた協定によれば、567年のカリベルトの遺産のうち、グントラムは自らの既得分に加えて、アウストラシア領となっていたパリの1/3、シャトーダン、ヴァンドーム、エタンブ、シャルトル、レッソン・s・マツツの1/3を獲得し、ヒルデベルトはモー、サンリスの2/3、トゥール、ポワチェ、アブランシュ、エールーバイヨンヌ、サン・リジェ (s.-Lizier) 及びアルビに加えて、母后ブルニヒデが妹ガルスヴィンタ (Galsuintha) の遺産、ボルドー (Bordeaux)、リモージュ (Limoges)、カオール (Cahors)、ベアルン (Béarn) 及びシユタ (Cieutat) のうち、カオールのみを相続し、他の4都はグントラムに帰した。従って

アウストラシア領は567年のそれより、セーヌとロワール両河間の諸都市を喪失したが、しかしアンデロー協約の規定によれば、2人の王ヒルデベルトとグントラムは両者が血縁の後継者なしに死亡した場合、互いを相続者に指名しており、592年のグントラムの死の際、この協約が忠実に履行されたことは、ヒルデベルトのアウストラシア王権の指導のもとで、ブルグンド分国との併合が行われ、ここに「大アウストラシア国家」成立の基盤が用意された。<sup>8)</sup>

595年ヒルデベルトの死はブルグンド＝アウストラシア分国の再分割を招き、子テウデベルト2世(Theudebert II. 在位595－612年)の下で成立したアウストラシア分国領と同じくテウデリヒ2世(Theuderich II. 在位595－613年)のブルグンド分国領とは、おそらくアンデロー協約の規定が基本となっており、後者がそれ加えて、モーゼル河上流のサントワ(Saintois)、シュワーベンのケンブガウ(Kembugau)、ボーデン湖とアルプス間のチウルガウ(Thurgau)及びエルザス(Elsaß)を所有した。<sup>9)</sup>

600年テウデベルト及びテウデリヒのアウストラシア＝ブルグンド連合軍とクロタール2世のネウストリア軍とのドルメイユ(Dormelles)の戦いにおける後者の敗北により、アウストラシア領はブローニュ(Boulogne)、テルアンヌ(Thérouanne)、アラス(Arras)、トゥルネ(Tournai)、カムブレー(Cambrai)及びヴェルマン(Vermand)など古きサリーの領域、パリ盆地ではモー及びソワッソンを、そして英仏海峡に達する旧ネウストリア領の広大なデンテリヌスの旧ローマ軍管区(ducatus Dentelinus)を所有した。なお、この時期のクロタール2世の領域はルーアンにネウストリア分国の中心に定め、セーヌ及びワーズ両河と海峡沿岸に挟まれた12のパグス(pagus)に限定され、ルーアン、ボーヴェ(Beaurais)及びアミアン(Amiens)の3都市の所有にとどまっている。<sup>10)</sup>

609/610年エルザスの領有をめぐるテウデベルトとテウデリヒとの対立は、612年前者かデンテリヌスのクロタールへの返還と引きかえにかれの中立を得たことにより、対決へと進展した。テウデベルトのトゥール(Toul)とチウルピッヒ(Zülpich)とのにおける敗北と死、このことにより成立したテウデリヒのブルグンド＝アウストラシア分国王権も、同年かれの死により、ブルニヒルデが擁立する、テウデリヒの子ジギベルト2世(Sigibert II. 在位613年)に引き継がれたが、同分国王権もアウストラシア及びブルグンド両貴族がクロタール支持にまわったことにより、敗北を喫し、ここに第2次分国時代は終焉をむかえた。<sup>11)</sup>

## 2) 614年までのアウストラシア分国の政治的中核地域 (sedes principalis) の変遷

このようなアウストラシア分国領の変遷にあって、同分国の政治的中心はどこに求められるのであろうか。第1次分国時代のテウデリヒ1世のもとでは、それはランスに置かれていたが、かれが東ゴートにイタリアにおける共同統治者としての地位を求める政策をとり、また東ゴート王権の保護下にあったアレマニエン、バイエルン及びレチエン (Rätien) の領有はアウストラシア分国領をラインを越えて南東に拡大したことにより、<sup>12)</sup> ランスが同分国の西端に位置するところとなった。テウデベルトは娘のベルトアラ (Berthoara) の住居をマイツ (Mainz) に定め、自らもトリアー (Trier) 及びヴェルダン (Verdun) に宮廷を有していた。<sup>13)</sup> ジギベルトのもとでは、モーゼル河流域のメッツ (Metz) がランスに替って、第1級の王の居住地となり、ここでかれとブルニヒルデとの結婚式を行っているが、このメッツ重視はヒルデベルト2世のもとで一層高まった。<sup>14)</sup> メッツはモーゼル河でもって、ライン河沿岸地域と結び、またブルゴーニュを従断してガリア東北部と南部とを結ぶアンダーナッハ (Andernach) = マルセーユ線のローマ街道と海峡都市ブーローニュからアミアン、ソワッソン (Soissons) を経て、ストラスブルグ (Straburg) に至る街道との交差点上にあり、<sup>15)</sup> 従ってアウストラシア分国王の „sedes principalis” がランスからメッツに移動したことは対アルプス=イタリア政策遂行のためではなかったか。事実ヒルデベルトは父ジギベルトが等閑視した対イタリア政策を再開し、<sup>16)</sup> 590年にはミラノを除く北イタリアを手中に収めている。<sup>17)</sup>

ヒルデベルトは長子テウデベルト2世を下王 (Unterkönig) としてソワッソンに配してネウストリアに対する防禦をほどこし、自らはコブレンツ (Koblenz)、マインツ、エルザスの両都ストラスブルグとマーレンハイム (Marlenheim) に滞在し、かれの次男テウデリヒがこのエルザスを養育地としている。なおヒルデベルトの軍隊徴集地はアウストラシア東部のマーストリヒト (Maastricht)、アンダーナッハ及びケルンであった。<sup>18)</sup> エーヴィヒによれば、アウストラシア分国の宮廷はブルグンド及びネウストリア両分国のそれに比べて、„sedes principalis” に強い結びつきをもっていない。それは同分国領域における都市制度の激しい崩壊とアウストラシア貴族の動向によって条件づけられていることを指摘している。

595年ヒルデベルトのアウストラシア=ブルグンド分国が再分割され、テウデベルト2世がアウストラシア分国を、テウデリヒ2世がブルグンドのそれをそれぞれ相続したとき、テウデリヒが自ら生まれ育った地、エルザスとトゥール (Toul) 司教区の諸ガウをブルグンド分国領としたことにより、アウストラシアの „sedes principalis”・メッツが同分国の南端に位置し、トゥールと隣接するにもかかわらず、同分国におけるメッツの地位は不動で

あった。このことはテウデリヒ及びシギベルト2世のブルグンド＝アウストラシア分国に<sup>20)</sup>あっても変わることはなかった。

### 3) クロタール2世の統一支配とアウストラシア分国

614年成立したクロタールの統一国家は3つの分国を解体して、ひとつの国家としての統合がはかられたのではなく、3分国の新国境を設定し、各分国がそれぞれの宮宰<sup>21)</sup>(major domus)をもちながら、連合体を形成した。この新国境設定の原則は、エーヴィヒによれば、ロワール河以北では、561年の第2次分割による国境に従い、またロワールとセーヌ両河間では、592年グントラムの死によるアンデロー協約の履行と595年ヒルデベルト2世の死によるアウストラシア＝ブルグンド分国再分割によって形成された国境が<sup>22)</sup>その基礎となっていた。

このように、クロタールが3分国の新国境を設定し、それぞれに宮宰を配し、これらの諸分国に統一国家を構成する役割を担わせたとするならば、それは「通説」に従って解釈を試みれば、諸分国の貴族権力の自立化への志向を王権側が認めたこととなり、また「通説」批判の解釈からすれば、それはクロタール王権のもとでネウストリア貴族が他の分国貴族の権益を侵すことを防ぐ狙いがあったとも考えられる。いずれにせよ、まずここでは、614年以後のアウストラシア分国の領域設定の問題から検討を始めることにしよう。

フランキア中央部、すなわちセーヌ河以東の3分国国境線が錯綜する地域にあって、614年アウストラシアにはランス、シヤロン・s・マルヌ、ラオン及びモーなどシャムパーニュ地方が帰属し、ネウストリアにはパリ、カンプレ、ヴェルマン(Vermant)及びソワッソンが、またブルグンドにはオルレアン、オーセール(Auxerre)及びサンス(Sens)がそれぞれ所属した。従ってアウストラシア分国領はモーを西南の境とし、西はソンム河畔(Somme)から東部はシェルデ河(Schelde)まで、北は海峡・北海沿岸にまで広がるデンテリヌスの旧ローマ軍管区第2ベルギカ属州(Prov. Belgica II)の北半分にあたり、アミアン、ブローニュ、テルアンヌ、ノウィヨン、トゥルネー(Tournai)、<sup>23)</sup>カンプレー及びアラスなどの諸都市を含み、南はモーゼル河上流メッツからエルザス地方にまで及んでいた。しかし、デンテリヌスの旧ローマ軍管区に関しては、ヒルデベルトがネウストリア分国から奪い取った領域であるだけに、614年の時点でネウストリア領域となった可能性が強い。

ところでクロタールがネウストリア分国の中心をルーアンからパリに移し、それを統一国家の中心都市としたことは、かれが614年国家統一を達成すると同時に、同都に全フランク教会会議を開催し、また同都からかれの政治の基幹となる勅令を発行した事実からも

明らかであろう。パリの所有は567年以来、ヒルペリヒ、フレデグンテ及びクロタールなどのネウストリア分国支配者の政策の主な目的となっていた。<sup>24)</sup>クロタールがパリに政治的中心を設定した理由はパリにあって、ローマ軍道の大幹線、すなわちルーアンからオートンに至るセーヌ＝ヨンヌ (Yonne) 街道を経てマルセーユに至る線とケルン＝ソワッソン＝オルレアン街道などが交叉し、またオルレアンからロワール街道に入り、ナント (Nantes) に至る街道がトゥールでシエルブール (Cherbourg) = ボルドー (Bordeaux) 街道に接続しており、まさにパリが交通の要衝であったからであった。<sup>25)</sup>

パリのかような地理的位置がアウストラシアに対して、どのような政治的意味をもつてであろうか。クロタールがパリにあって、アウストラシア支配を行う場合、ソワッソンを起点として、アウストラシア北部に対しては、ヴェルマン、マーストリヒト、バヴェ (Bavai) 及びトングル (Tongres) を経てケルンに至る街道に沿って行われ、また同分国の南部、すなわち „sedes principalis” のメッツに対しては、同じくソワッソンからランスを経てストラスブルグに至る街道を利用したことは明らかであろう。とすれば、前述したように、この時期にランスがアウストラシア分国に帰属したことは統一支配権を掌握するネウストリア分国から中心都市メッツを保護したことを意味したのではなかろうか。エーヴィヒが言うように、ランスがネウストリア分国からみて、アウストラシアの „Kronland” への中間地点にあり、パリがブルグンドの „Krongut” へのかけ橋であったとすれば、パリが統一国家の „sedes principalis” となったことは、クロタールにとってアウストラシアよりも文化的にも、経済的にも高度な発展段階にあるブルグンドとのつながりを求めたからであり、またかれの統一支配の初期の段階でネウストリアとアウストラシア両分国の融合が行き詰り、それ故に南ガリアとの関係強化がはかられたからではなかったか。<sup>26)</sup>

623年クロタールの長子ダゴベルト1世をもってアウストラシアに下王権を創設したのは、後述するように、アウストラシア貴族の自立主義及至は分立主義的動きを吸収し、これをもってアヴァール族の侵攻を防御するところにあった。しかし、この場合、クロタールが自らの支配権をネウストリア＝ブルグンド分国に限定し、ダゴベルトには自立的なアウストラシア分国王権を認めたのかどうか不明であるが、少なくとも父王がアウストラシアに対する上級支配権をもっていたことは確かであろう。このアウストラシア下王国の領域は、フレデガールによれば、ネウストリアに対してはアルデンヌ (Ardenne) の森林地帯と、ブルグンドに対してはヴォージュ (Voges) のそれを国境とした。<sup>27)</sup>このフレデガールの報告には、アウストラシア北東部国境の言及が欠如しているが、エーヴィヒは古代末期以来、ラインとマース両河流域の第2ゲルマニア属州とシェルデ河流域の第2ベルギカ

属州とを分けへだてる「石炭の森」(silva Carbonaria) がそれであったと推定している。<sup>28)</sup>  
 このことから、クロタールはアウストラシアからランス、ラオン及びシャロン・s・マルヌのシャムパーニュを奪い、パリからランスを経てアウストラシアの政治的中心都市メッツに影響力を行使しうる体勢を保持したことは確かであろう。しかし、ヴォージュ及びアルデンヌ森林国境については、不明な部分が多く、ヴォージュ森林の北端はモーゼル河の右岸に沿って、トリアーからコブレンツ (Koblenz) までのびており、アルデンヌのそれはトリアー及びマーストリヒト両司教区の境界線ともなっている。このフレデガールの報告が正しいとすれば、マーストリヒト及びトリアーばかりか、モーゼル河畔のメッツそのもののアウストラシア所属が疑われるが、メッツに本領をもつアウストラシア貴族の指導者アルヌルフ (Arnulf) とマーストリヒトに所領をもつピピン (Pippin) がともにダゴベルトの側近となっており、しかもメッツにひきつづき、アウストラシア下王権の „sedes principalis” が置かれていたことは確かであった。トリアーに関しても、ダゴベルトが父王の意志に反して、アギロルフィンガー家 (Agilolfinger) のクロドアルド (Chrodoald) を、モーゼルランドのガウ・スカルボンヌ (Gau Scarponne) 出身のベルタル (Berthar) によってトリアーで謀殺せしめている事実からもアウストラシア領の蓋然性は高い。エーヴィヒによれば、ニタルド (Nithard) 及びブルデンティウス (Prudentius) の報告にある873年の国家分割から推定して、メッツの南に隣接するモーゼル河畔のトゥール (Toul) 司教区は2分され、Toul (pagus Tullensis)、pagus Odornensis、pagus Bedensis 及び pagus Barrensis の4つのガウはブルグンド分国に属したが、同教区の北部のスカルボンヌ、スウロス (Soulosse)、サントワ (Santois)、ショウモントワ (Chaumontois) など西ヴォージュ地域を含む pagus Suggestensis は同分国に属さず、しかもそれがメッツの影響下にあったところから、アウストラシア領と推定しうる。<sup>29)</sup> ランスからメッツに抜けるローマ街道の中間点、ヴェルダンについて、エーヴィヒはトゥールと同司教区の南西部がブルグンド領であったなら、ヴェルダンも同領となる可能性をほのめかしているが、しかし前述したように、地理的距離からして、ヴェルダンがランスよりもメッツに接近しており、対アウストラシア政策に有利な立地条件にあり、同都がクロタールの支配下にあった可能性も残る。フレデガールが625/26年のクロタールの支配領域として、プロヴァンスと併記している「ロワール河ノ此方」(citra Legere) がアキタニアにおける旧アウストラシアの飛領を表わしているなら、623年のダゴベルトのアウストラシア下王国は同飛領も奪われており、同分国史上最も縮小された領域となった。<sup>30)</sup>

625/626年ダゴベルトがパリの近郊クリシイ (Clichy) で、父王クロタールの命令でかれの継母シヒルデ (Sichilde) の妹ゴマトルデ (Gomatrude) と結婚したとき、かれは父



王に対してアウストラシア領全域の返還を求め、そのことにより父子間で対立が生じた。メッツ司教アルヌルフを含む12人のフランク貴族の調停によって、クロタールはダゴベルトに「ロワール河ノ此方」、すなわちアキタニアとプロヴァンスの旧アウストラシア領以外の古きアウストラシア領、すなわちモーゼル河流域とランス、ラオン及びシャロン・s.マルヌなどのシャムパーニュ地域を含む領域を返還した。アウストラシア下王国はこの処置によって、561年の分国時代の西部国境を回復したが、561年から612年まで間にネウストリアから奪ったソワッソン、モー及びデンテリヌス旧ローマ軍管区は返還の対象にされず、ネウストリア領にとどめ置かれた。

#### 4) ダゴベルト1世の統一支配とアウストラシア

629年クロタール2世の死去によって、ダゴベルトが全フランク国家の支配権を継承したとき、かれは弟カリベルト2世（Charibert II. 在位628－632年）にアキタニア下王権を与えた。フランクの国家分割相続の慣習は兄弟間の平等分割相続であり、しかもその対象となった領域はロワールとライン両河間のフランキア地方であった。カリベルトの下王国はトゥルーズ（Toulouse）、カオール、アジャン（Agen）、ペリゲー（Périgueux）、サント（Saintes）などの諸都市とそこからピレネー山脈に至るまでの領域に、ジャヴォルス（Javols）、ロデズ及びアルビなど諸都市が加わっており、従来のフランキアの分有というメロヴィンガー的伝統から逸脱している。このダゴベルトのアキタニア下王権の構想はタロタールのアウストラシア下王権のその踏襲であり、その創設はアキタニアの自立化に対する譲歩とバスク人の侵攻に対するピレネー山脈の国境線の防衛強化のためであった。しかしこの下王権もカリベルトの632年の死で、ダゴベルトの統一王権に吸収される。

633/634年ダゴベルトは長子ジギベルト3世（Sigibert III. 在位633－656年）をもって、アウストラシア下王国を再興した。<sup>34)</sup>それはかれが前年、ヴェンデ（Wende）王ザモ（Samo）に対する再度の遠征の失敗したことにより、フランク国家の東部地域の安全が脅やかされたための処置であった。このヴェンデ戦におけるフランク軍の主力は第1回の遠征と同じくアウストラシア人によって占められており、この際、ダゴベルト指導下での敗北は同王に対する不信をかれらのなかに生み出したのであろう。R. バルーはこの敗北の原因をすでにアウストラシア人のなかに醸成されていたダゴベルトの政策に対する不満に求めている。<sup>35)</sup>すなわち、それはダゴベルトがフランク統一国王となったのち、かれの政治の中心をメッツからパリに移し、政治的指導権をネウストリアに掌握されたところにあった。634/635年ダゴベルトがネウストリア貴族の要請に従って定めた分割相続規定によれば、次子クロードウヒ2世（Chlodwig II. 在位638－657年）がネウストリア＝ブルゲン

ド分国を相続し、ジギベルトにはデンテリヌスの旧ローマ軍管区のネウストリア分国への帰属を認める以外は、アウストラシア分国領が何ら縮小されることなく、「古クカラ、<sup>36)</sup>アウストラシア人ノ国ニ属シタスベテノ所領」が認められたが、ジギベルトに「メッツニ居ヲ構エルコト」すなわちメッツに政治の中心を据えることが承認されたことを除けば、フレデガールが報告する同分国領域については不詳である。その領域がエーヴィヒの言う623年の最も縮小された領域であったのか、それとも「古クカラ、<sup>37)</sup>アウストラシア人ノ国ニ属シタスベテノ所領」がプロヴァンスとアキタニアの飛領と解釈するA. クスターニヒの見解が正しいとすれば、そこにはシャムパーニュの帰属についての同女史の言及はないが、上記フレデガールの「古クカラ、<sup>38)</sup>アウストラシア人ノ国ニ属シタスベテノ所領」のなかにシャムパーニュが含まれていると解釈すべきであり、それは625/626年のクリシイのそれと一致する。クロタルが内政を重視し、対外政策を等閑視した結果、かれのアウストラシア政策がもっぱら同地域の自立化の欲求を下王権でもって充足をはかりながら、東方に対する外壁の役割を果させることに留まったが、ダゴベルトは父王の政策を継承しながら、対ヴェンデ戦のようなチュウリンゲン政策を展開した。メッツからカイザーラウテルン(Kaiserlautern)を経てヴォルムス(Worms)に至るローマ街道はこの政策を遂行するための動脈であった。とすれば、この動脈につながるソワッソンを始め、その線上の交通の要衝ランス、それにメッツを扼する位置にあるヴェルダンなどの諸都市が、ネウストリア＝ブルグンドに統一王権の基盤を置きながらライン右岸地域にフランク支配拡大をはかるダゴベルトの領域にくみ入れられた可能性は充分ありうる。すなわちライン河以西のフランキアにおけるジギベルト3世のアウストラシア下王国領は623年の小アウストラシアのそれと一致するのではなかろうか。しかし、ダゴベルトの積極的な対外政策はライン右岸沿い、の地域及びチュウリンゲンの地域、シュパイヤー(Speyer)とヘッセン(Hessen)<sup>39)</sup>地域、加えてボーデン湖とアルプスとの間の地域<sup>40)</sup>をフランク領としており、これらの地域は後記のそれを除いて、ジギベルトの支配領域にくみ入れた。しかしフランキアの領有に比べてライン河以東の諸地域の領有が果して、どれほどアウストラシア勢力の拡大につながったかは不明である。

#### 注

- 1) E. Ewig, Die Fränkischen Teilungen und Teilreiche (511–613), Ders. Spätantikes und Fränkisches Gallien I, Beihefte d. Francia Bd. 3/1, München 1976, S. 115. 本書については、以後 Teilreiche I と略称。
- 2) E. Zöllner, Geschichte der Franken bis zur Mitte des 6. Jahrhunderts, München 1970, S. 87.; Ewig, Das Merowingische Frankenreich (561–687), Handbuch d. Europäischen Geschichte, Stuttgart 1976, I. S. 262.

- 3) Ewig, *Teilreiche I*, S. 152.
- 4) *ibid.*, S. 137.
- 5) パリについて、エーヴィヒは中立性が保たれていたとしているが (*ibid.*, S. 139)、しかしアンデロー協約から推定すれば、3 分国間で $\frac{1}{3}$ づつ分割されたことをうかがわせる。
- 6) Ewig, *Teilreiche I*, S. 139.
- 7) 拙稿「Gunthramnus の統一政策と聖俗両貴族権力」 名古屋大学文学部研究論集 50 号 昭和 45 年、参照。
- 8) Gregorii Episcopi Turonensis Libri Decem (*Historia Francorum*) IX, 20. 兼岩正夫、臺幸夫訳注「トゥールのグレゴリウス、歴史十巻 (フランク史)、東海大学出版会、昭和 52 年、2 巻 327—337 頁。
- 9) Fredegarii Chronicorum Liber Quartus cum continuationibus, J. M. Wallace—Hadrill, *The Forth Book of Chronicle of Fredegar with its continuations*, Medieval Classics, London 1960, 16, p. 11, p. 37, p. 29f; Ewig, *Teilreiche I*, SS. 148 u. 176.
- 10) Fred., IV, 20, Wallace-Hadrill, p. 13; Ewig, *Die fränkischen Teilreiche im 7. Jahrhundert* (613—714), *Beihefte d. Francia* Bd. 3/1 S. 176. 以後 *Teilreiche II* と略称。
- 11) Fred., IV, 38, pp. 30—32; 39, p. 32; 40, p. 32f; 41, p. 34.
- 12) H. Büttner, *Die Alpenpolitik der Franken im 6. u. 7. Jahrhundert*, *Historisches Jahrbuch*, 79. Jahrgang 1960, S. 66.
- 13) Ven. Fortunati Carmina III, 11, MG. AA. IV/1, p. 40f.
- 14) Gregorius Turonensis, *Vita Patrum* XIII, 2, p. 729; Ewig, *Teilreiche I*, S. 167.
- 15) Fortun. Carm. X. 9., MG. AA. IV/1, p. 243.
- 16) E. Salin, *La Civilisation Mérovingienne*, Paris 1950, I, Carte 1.
- 17) 拙稿「教皇グレゴリウス 1 世のゲルマン政策 (1)」 名古屋大学文学部研究論集第 56 巻 昭和 48 年 144 頁。
- 18) Ewig, *Teilreiche I*, S. 168.
- 19) *ibid.*, S. 169.
- 20) Fred., IV, 39, p. 32; 40, p. 32f.
- 21) Fred., IV, 42, p. 35.
- 22) Ewig, *Teilreiche I*, S. 151.
- 23) R. Barroux, *Dagobert roi des Francs*, Paris 1938, p. 26
- 24) Ewig, *Teilreiche I*, S. 151.
- 25) Salin, *op. cit.*, I, Carte 1.
- 26) Ewig, *Teilreiche II*, S. 175.
- 27) Fred., IV, 47, p. 39.
- 28) Ewig, *Teilreiche I*, S. 115, N. 8; II, S. 194.
- 29) *ibid.*, II, S. 195f, N. 90.
- 30) Fred., IV, 53, p. 44.
- 31) フレデガールの視点の設定がどこに置かれているか不確かであるが、R. シュブランデルが言うように、フレデガールの年代記がふたりのブルグンド人とひとりのアウストラシア人の手によるものであって、われわれが史料として用いる同第 4 章がアウストラシア人の作であるならば、それはアウストラシアに視点を置くこととなり、「ロウール河ノ此方」はシャムバーニュ地方及びヴェルダンのアウストラシアからの喪失を裏付ける (cf. R. Sprandel, *Der merowingische Adel und die Gebiete östlich des Rheins*, Freiburg, 1957 S. 73f)。とすれば、ダゴベルトはプロヴァンスの旧アウストラシア領の飛領は失っているが、アキタニアのそのの所領は認められると

のバルー説も肯定される (Barroux, op. cit., p. 117.)。しかし、エーヴィヒは「ロウール河ノ此方」をアキタニアと解している (Ewig, *Teilreiche II*, S. 196)。本論は父子間でシャムパーニュ地域の領有問題が「小アウストラシア」か否かを決定するがゆえに、ここではエーヴィヒ説に賛同した。

- 32) Fred., IV, 57, p. 47f.
- 33) Ewig, *Teilreiche II*, S. 197.
- 34) Fred., IV, 75, p. 63.
- 35) Barroux, op. cit., p. 128.
- 36) Fred., IV, 76, p. 64.
- 37) Quellen zur Geschichte des 7. und 8. Jahrhunderts, A. Kusternig, Die vier Bueher der Chroniken des sogenannten Fredegar, *Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters*, Darmstadt 1982, Bd. IV a, S. 249, N. 37.
- 38) Ewig, *Teilreiche II*, S. 201.
- 39) Ewig, *Das merowingische Frankenreich*, S. 411.
- 40) Büttner, op. cit., S. 86.

## II. クロタル2世及びダゴベルト1世の統一王権とアウストラシア貴族

### 1) 614年までのアウストラシア貴族の動向

614年クロタル2世による統一国家成立にアウストラシア貴族がブルグンド貴族とともに決定的な役割を果し、通説が主張するように、614年のパリ勅令が王権に対する貴族権力の確立とその主張の反映であるとするれば、われわれは本章にあって、アウストラシア貴族がメロヴィンガー王権にどのようなかわりをもったか、またクロタル及びダゴベルト両王権下において、アウストラシア貴族がどのような動向を示したかを明らかにすることによって、パリ勅令が貴族の „privilegium” または „magna carta” あると言えるかどうかの問題にひとつのアプローチを試みることにしたい。まずこの問題を検討する手がかりとして、587年のアンデロー協約の成立時における王権とアウストラシア貴族との関係についての考察から始めることにしよう。

すでにアンデロー協定については拙稿で触れたが、<sup>1)</sup>ここで再考を試みることにしよう。グレゴールの「フランク史」のなかに収録されている同協約の規定から読みとれるかぎり、同協約はグントラムとヒルデベルト及とブルニヒルデとの間でとりかわされたブルグンド及びアウストラシア分国王権間のとりきめであって、それは511年、561年及び567年の国家分割を既成事実としたうえで過去の内紛の原因となった所領関係の調整を行い、血縁的相続人なしに死亡した場合、互いを後継者すなわち相続人に指名することによって両分国王権の安泰をはかることを目的としている。同協定のうち3項目は前章で触れたように、所領関係の規定であるが、残る3項目は両分国のレウデス (leudes) 及びフィデレス (fideles) に関わる規定であり、この3項目の検討が587年から少なくとも600年頃までの

王権と貴族権力との関係を間接的ではあるが、われわれに推測を可能とする手がかりを与えてくれるであろう。

ここに、3 項目の内容を示せば、1) 561年クロタール 1 世の死の際、グンドラムあるいはジギベルトに忠誠を誓いながら、のちにこれを破棄したレウデスは561年の状態に立ち帰らせ、さらに両分国がいかなる状況にあっても、他の分国のレウデスを受け入れず、かれの所属分国のもとに引き渡すこと、2) クロタール 1 世の死後、フィデレス及び教会にグンラム及びジギベルト両分国王から贈与乃至は寄進された所領が法的に正当と認められた場合、その所有権は保障され、また国家分割の際、所有者の罪過なしに、その所有権が侵害された場合、調査のうえ回復されるべきこと、なおクロタール 1 世の死以前に諸分国から贈与を受けた所領も保障されるべきこと、そして最後に 3) 両分国間の公私にわたる自由交通権を双方のレウデスに認めること、以上 3 項目であった。

まず、アンデロー協約が成立時における王権と貴族権力両者の関係から検討すれば、F. イルジグラールによれば、同協約がとり結ばれる際、トゥールのグレゴリウスが伝える「聖職者ト有力者ガ仲介シテ」(mediantibus sacerdotibus atque proceribus)の言葉は貴族と司教らがこの協議に決定的にかかわったことを意味したのであり、また上記・3 項目の規定にみられるように、国王に忠誠を誓った貴族たちに所領及び諸権利の保障が考慮されているのは、貴族権力に対する譲歩であった。<sup>2)</sup>「通説」をほぼ認めたイルジグラール説が正しいと言えるかどうかを判断する際、ここで587年の時点の貴族権力の状況と協約の性格を検討しておく必要があろう。

まず当時の貴族権力の状況から検討を始めよう。イルジグラールの見解によれば協約の成立がソワッソンの大公で、ヴァイセンブルグ(Weieuburg)修道院建設家門・クロードイン・ジッペ(Chrodin=Sippe)に属するラウヒング(Rauching)、ヴェルダン東北のウェヴルガウ(Waevregau)のウルジオ(Ursio)及びベルテフレド(Berthefred)、ガウ・シャルペイニュ(Gau・Charpaigne)のボゾーネン・ジッペ(Bosonen=Sippe)に属するとみられるグントラム=ボゾ(Guntram=Boso)及びヴェルダン司教アゲリヒ(Agerich)<sup>3)</sup>などヴェルダン貴族家門群の南アウストラシア貴族団の587年の叛乱に対する王権側からの反動の結果であった。叛乱の陰謀の発覚が王権強化を目的とする協約締結となったというイルジグラール説はこの限りでは正しい。しかし「聖職者ト有力者ガ仲介シテ」と言うグレゴリウスの言葉から、貴族が協議に影響力を及ぼすほどの存在であったとする解釈は疑問である。

この疑問点を明らかにするために、アウストラシア貴族の動きを追ってみることにしよう。アウストラシア貴族は575年かれらの分国ジギベルトが謀殺されたのち、その子ヒル

デベルト摂政政権を担う大公グンドヴァルド (Gundowald)、幼王の侍従ゴゴ (Gogo)<sup>4)</sup> 及びランス司教エギディウス (Egidius) らに、上記・ヴェルダン貴族家門群の南アウストラシア貴族団を加えたグループとヒルデベルトの母后ブルニヒルデを支持するシャムパーニュの大公ループス (Lupus)<sup>5)</sup> とその義子ゴードギセル (Godegisel) を中心とするグループ<sup>6)</sup> に分裂した。前者グループはネウストリア貴族と内通し、ブルグンド分国の征覇を目的とする対グントラム同盟をネウストリア分国王ヒルベリヒと結び、いまだ相続人となる実子をもたない同王から、かれらの王ヒルデベルトを後継人とする約束をえたのである。<sup>7)</sup>

アウストラシア貴族勢力の失墜の始まりは585年クロタリウス1世の庶子と称するグンドヴァルド (Gundowald) のアキタニアの篡奪政権の崩壊に求められる。かれは582年「アル人物ニ招カレテ」アキタニアに篡奪政権を樹立したが<sup>8)</sup>、「アル人物」とは、R. ブフナーによれば、アウストラシア貴族グループの指導者のひとり、ランス司教エギディウスであった。<sup>9)</sup> グンドヴァルドの謀殺による同篡奪政権の崩壊はアウストラシア貴族に衝撃を与え、同年ヒルデベルトの側近で、侍従・教育係ヴァルデレン (Waldelen) の死後、ブルニヒルデは後任者の任命をこばみ、ヒルデベルトをかの女の直接的指導下に置いたのである。<sup>10)</sup>

587年のアウストラシア貴族の叛乱とは、かれらがネウストリア貴族と再度提携して、ヒルデベルト及びブルニヒルデを殺害して、ラウヒングがヒルデベルトの長子テウベルトを擁立して、シャムパーニュを支配し、次子テウデリヒはウルジオ及びベルテフレドらの手により、シャムパーニュ以外のアウストラシア領域で支配の座に据えられることになっていた。グントラムがこの陰謀を摘発し、かれとヒルデベルト及びブルニヒルデ3者はこの叛乱グループを一掃した。<sup>11)</sup> そしてアウストラシア貴族グループの指導的立場にあったランス司教エギディウスも590年のメッツ教会会議でこの陰謀に加担した容疑で追求を受け、有罪として聖職剝奪の刑をかせられ、ストラスブルグに追放された。<sup>12)</sup> 前年にもアウストラシア宮廷内でブルニヒルデとヒルデベルトの妃ファイレウバ (Faileuba) 謀殺計画が発覚し、それに参画した者として家畜係のグラーフ (Comes stabuli) のスンネギシル (Sunegysil)、尚璽 (Referendarius) のガロマグヌス (Gallomagnus)、王子教育係ドロクトルフス (Droctulfus) 及びセプティミナ (Septimina) らの名が明らかとなっている。<sup>13)</sup> この一連のアウストラシア貴族の叛乱の結果、グレゴールが伝えているように、「コノ時期、多クノ人ビトガ国王ヲ恐レテ他ノ地方ニ去ツタ。幾人ノ者タチガ大公ノ最高位カラシリゾケラレ、ソレラノ地位ヲ他ノ者タチガ継イダ。」<sup>14)</sup> のであり、王権によるアウストラシア貴族グループの徹底的な改組が行われ、ブルニヒルデ派ループスとプロヴァンスの王領地の管理者 (rector) ディナミウス (Dynamcus) を亡命先のグントラムのもとから呼び戻し、

ループスの子ロムルフス (Romulfus) をエギディウスの後任としてランス司教に叙任し、また叛乱派の疑いのあるヴェルダン司教アゲリヒの後任に宮廷人で尚璽のカリメル<sup>16)</sup> (Charimer) を叙任したことは、ネウストリアに隣接するアウストラシア領シャムバーニユを王権の支配下に置き、常にアウストラシア王権を脅かした両分国貴族の提携を断ったのである。

以上のことから明らかなことは、587年アンデロー協約締結時におけるアウストラシア貴族権力は王権に対抗する力を失っていたと言えよう。584年ネウストリア分国王ヒルベリヒの死後、グントラムはかれの兄弟の諸分国王がすべて死去したことによって、かれの甥にあたる後継諸王を保護下に置く事実上の統一政策をとるところとなった。<sup>17)</sup> H. グラーン＝ホエークによれば、同協約の目的はヒルデベルトが死去した場合、グントラムがヒルデベルトの子テウベルト2世及びテウデリヒ2世を保護 (tuitio et defensio) 下に置き、かれらに父の国家の所領を伯父の立場で保証することによって貴族からの „tuitio” というかたちでの侵害を排除することであった。<sup>18)</sup> さらに同女史によれば、実子をもたないグントラムがヒルデベルトにメロヴィンガー王家の運命を託したのは、かれが2人の後継者をもつ唯一の王であるからであり、幼年期をいまだ出ないネウストリア分国クロタール2世では、貴族勢力に対抗してメロヴィンガー王家のために自己貫徹しうるかどうが見通しがつかなかったらであり、またヒルデベルト自身が実力者でなかったとしても、かれの背後にはブルニヒルデが控えており、かの女に対する期待をグントラムに抱かせたのであろう。<sup>19)</sup> グントラムのクロタールに対する態度が果してグラーン＝ホエーク説通りであるかどうか疑問であるが、アンデロー協約の狙いが貴族権力に対抗する王権の強化と安定化であったとする同女史の見解は正しい。

先に触れたように、アンデロー協約の2分国間の所領関係の規点が、第2次分国時代の内紛が諸分国王による所領の争奪にあったとの反省に立って、分国間における所領関係の調整による秩序の回復であったとするならば、このことがレウデス及びフィデレスの規定とどのようなつながりをもつのであろうか。まず、このレウデス身分について、イルジグララーによれば、レウデスは単なる家臣あるいは不自由人ではなく、かれら自らが不自由人身分の従士を支配し、王権に対してはかれらの同意にもとずいてのみ仕える自立性をもった貴族であり、石川 操氏もこれと同一の見解をとっている。<sup>20)</sup> これに対して、グラーン＝ホエークは6世紀のフランク史にあって、レウデスとそれと同じ政治的行動をとる „exercitus” 及至は „populus” とは同一視すべきであって、„Großen” と同列とみなすべきではないとして、レウデスをフランク国王の軍隊の中核を形成する自由人層に属する者として<sup>21)</sup> いる。<sup>22)</sup> ここではフィデレスを含めたレウデスを貴族とする視点からレウデス及びフィデレスに関

わる規定を考察するならば、1) フィデレスの所属分国の固定化も、また、2) レウデスの所領問題もいずれもかれらの権利の保障というよりは王権による秩序の回復という分国王間の所領関係の調整と同一の路線に立つものであった。そしてレウデスに両分国間の公私にわたる自由交通権の保障の規定はイルジグラールが主張する「貴族にも他の分国に存在する所領の所有権及び相続権を有効ならしめる」<sup>23)</sup>という貴族の権益保障の側面は確かに認められる。本邦でも、坂田正二氏がレウデス及びフィデレスに関する協約の条項に、条項の本文の書き出し部分 „similiter” が突如として記されている点に着目し、この条項が分国王相互の関係を調整する条項との質的相違を指摘し、とくに自由交通権の条項は「家臣」の所領が分国にまたがって存在する所領の散在性から、この条項は「家臣」の側から王権につきつけた要求であった<sup>24)</sup>。しかし、この条項は王権の側にもイルジグラールも認める国王使節の往來の安全性の保証のほかに、アキタニア及びプロヴァンスに存在する各分国の飛領という形態の王領地の経営のためにも必要とされたことに注目すべきであろう。

アンデロー協約は、F. ドゥ・クーランジュが指摘するように、2人の分国王間の国家の公文書の性格をもたない単なる約定であるとし、またA. M. ドラベックも本文と用語から全く私的な協定 (Pakt) とみなしている<sup>26)</sup>。トゥールのグレゴールの言う「聖職者ト有力者が仲介シテ」の言葉が、イルジグラールの解釈のように両者が協議に決定的にかかわったのではなく、単なる「陪席」を意味したにすぎなかったことは、587年の時点におけるアウストラシア貴族が先にみたように、王権による改組により弱体化しており、王権側に立った同貴族グループも王権に対抗する勢いをもってはいない新アウストラシア貴族団であった。またグントラム支配下のブルグンド分国の貴族グループは、篡奪者側についたグントラムの大公で、プロヴァンスの王領地の管理者 (rector) のムンモルス (Munmolus) <sup>27)</sup>以外は、同王権下にくみこまれたローマ・セナトール貴族、旧ブルグンド貴族及びフランク貴族によって構成されており、この貴族権力がグントラムに譲歩を強要する力をもっていたとは認められない。まさにアンデロー協約は H. レーヴェが言うように、王権による統一支配と貴族に対する制御への道であった<sup>28)</sup>。

かような王権によるアウストラシア貴族権力の制圧は同分国王ヒルデベルト 2 世の 595 年の死でもって崩れ始め、599 年ブルニヒルデ摂政政権下のアウストラシア＝ブルグンド分国が 2 人の孫テウデベルトとテウデリヒに分割されたが、この際に決定的な役割が演じたのがアウストラシア貴族であり、またブルニヒルデをアウストラシア分国からブルグンド分国に追放した事件はまさにアウストラシア貴族勢力の再興を示す象徴的な事件であった<sup>30)</sup>のである。



ところで、614年に結実するネウストリア分国王クロタール2世とアウストラシア貴族との繋りの形成はいつの時期に求められるのであろうか。ネウストリア及びアウストラシア両貴族の提携は常に対グントラム同盟というかたちで、581年アウストラシアのランス司教エギディウスとネウストリアのバイユー（Bayeux）司教レウドヴァルド（Leudovald）との間で、また間接的であるが、584年ネウストリア分国王ヒルベリヒ謀殺事件後、西南ガリアのネウストリア貴族団は<sup>31)</sup>アキタニアにおけるグンドヴァルドの篡奪王権に対する支持を通じて結ばれており、そして両貴族の結びつきは587年の不首尾に終わったクーデター計画でその頂点に達している。587年以後の動向は窺いえないが、603年クロタールがセーヌとワーズ両河川と大西洋とに挟まれた12のガウに限られたネウストリア領をセーヌを越えてロワール河まで拡大をはかるため、ブルグンド分国テウデリヒ及びブルニヒルデに戦いを挑んだとき、テウデベルトが中立を守ったのはブルニヒルデ追放後のアウストラシアの実権を握った同分国貴族がクロタールとの協同を始めたことを示している。<sup>32)</sup>

613年ブルニヒルデがブルグンド＝ネウストリア戦に備えて兵力を求めて、曾孫ジギベルト2世をチュリンゲン地域、すなわちマイン河流域に派遣したこと、<sup>33)</sup>マインツ司教レウデガシウスがブルグンド分国王権側についたこと、<sup>34)</sup>そしてクロタールに対する行動を起すまで、ブルニヒルデがアウストラシアの „sedes principalis”・メッツを掌握していたこと、これら3つの事実は少なくとも613年まで南部アウストラシア、メッツ＝ヴォルムスがブルニヒルデの支配下にあったことを示しており、それは587年前出・反王権派のヴェルダン貴族家門群の一扫の結果ではなかろうか。ブルニヒルデが司教エギディウス追放によるランスの掌握とともにヴェルダン及びメッツ地域を支配下に置いたことは、いくたびかくりかえされてきたアウストラシア貴族とネウストリアの王権及び貴族との連携を断つ政治目的をもっていたのではないかということはすでに指摘した通りである。

614年クロタールが北部アウストラシアのマース中流域、マーストリヒト周辺に本領をもつピピンの支援を受けて、北部からマーストリヒトを経てライン河畔のアンダーナッハ（Andernach）に至るアイフェル（Eifel）街道に沿って進出したことは、ブルニヒルデに対するクロタールと北部アウストラシア貴族との結合の成功を示している。一方では、ブルニヒルデはメッツからマルヌ河畔のシャロン・s・マルヌの北方、アウストラシアとネウストリア両分国の国境に進出したとき、側近を含むブルグンド＝南部アウストラシア貴族の叛乱によって壊滅した。これら叛乱貴族は、フランク系と推定されるブルグンド分国の宮宰ヴァルナカール<sup>36)</sup>（Warnachar）がブルグンドのパトリキウスの位をもつアレテウス

(<sup>37)</sup>Aletheus)、家畜係のグラフからテウデリヒのもとで大公となったロッコ (<sup>38)</sup>Rocco)、同じく大公の称号をもつシゴアルド (<sup>39)</sup>Sigoald) 及びブルグンドの pagus Ultraiuranus の大公エウディラ (Eudila) ら、フレデガールが伝えるブルグンド系聖俗両貴族ブルグンドファローネス (<sup>40)</sup>Burgundofarones) らであり、さらにメッツに本領をもつ南アウストラシア貴族のアルヌルフがこれに加わっている。<sup>41)</sup>この叛乱を醸成した要因はブルグンド分国貴族のありかたとブルニヒルデの政治理念に求められる。ブルグンド分国貴族には、593年ヒルデベルト2世がアンデロー協約に従ってグントラムの遺産を相続して、ブルグンド＝アウストラシア分国を形成した際、多くのアウストラシア貴族がブルグンド分国内に所領をもち、定着したのであろう。595年ヒルデベルトの死で再び2つの分国となったのちも、ブルグンド分国のテウデリヒ王権を支えた貴族層、ガロ＝ロマン系、旧ブルグンド系及びフランク系のなかで、後者が指導的役割を果たしたと推定される。そのフランク系がアウストラシア貴族であったことは、ジギベルト1世に仕えたアウストラシアのヴァルナカールが<sup>42)</sup>上述のブルグンド分国の宮宰と血縁的つながりをもつことから立証される。しかも、これら3系貴族は王権にそれぞれ異なったかたちで対応していた。ガロ＝ロマン系貴族はグントラム及びブルニヒルデのローマ的政治理念にもとづく統一政策に協力的で、親王権的であり、このことは、グントラムがブルグンド分国のパトリキウスの榮譽職にあいついで3人のセナトール貴族を据え、また同貴族に占められていたブルグンド高級聖職者の支持を得ており、またブルニヒルデもこのグントラムの政策を継承し、2人の宮宰プロタディウス (<sup>43)</sup>Protadius) 及びクラウディウス (Claudius)、パトリキウスのリコメリス (Ricomaris) らのセナトール貴族層に自らの権力的基盤を置いていたことから明らかである。また旧ブルグンド貴族及びフランク貴族に関しては、614年の摂政政権に対するかれらの政治行動が示すように、両者はブルニヒルデの体制下にはくみ込まれてはいなかった。とりわけ旧ブルグンド貴族の行動が単に反ブルニヒルデ的なものでなく、フランク支配からの分離主義的な傾きによるものであったことは、「ブルグンド人達ノ国王家門」の自出をもつパトリキウスのアレテウス (Aletheus) が614年クロタル統一王権成立に組みしながらかも、614/615年同王権に叛逆を試みており、またクロタルがユラ山脈東部のガウ (pagus Ultraiuranus) の dux の職にブルグンド貴族エウディラに替えて、フランク人のヘルポ (<sup>44)</sup>Herpo) を据える試みを武力で阻止した事実からもうかがえる。

## 2) クロタル2世の統一国家とアウストラシア貴族

フレデガールの報告から明らかのように、614年のクロタル2世の統一支配権樹立の成功がアウストラシア及びブルグンド両分国貴族の支援によるものであり、また国制史上、

ローマ的政治理念からゲルマン的・中世的政治理念への転換に指導的役割を果たしたのが、ガリア東北部のゲルマン的資質に富むアウストラシア貴族であった。われわれはここで、とぼしい事実からクロタールとアウストラシア貴族との関係を明らかにする手がかりを得るために、同王の対貴族対策の検討から始めることにしよう。

クロタールの統一国家成立のあと、クロタールが3分国にそれぞれ宮宰を置いたことは、3分国の分立主義的傾向を認めながら、この宮宰職を通して3分国を統治することを意味する。ネウストリアの宮宰にはグンドランド<sup>45)</sup> (Gundoland)、アウストラシアにはラド<sup>46)</sup> (Rado) そしてブルグンドには前出・ヴァルナカールがそれぞれ任命された。グンドランドは „vir illustrius” の尊称をもち、ネウストリア分国のル・マンのガウにある villa Neogilio (Mogiogilo) のほか、ブルジェ、アルビ、カオール及びアジャンなどのアクタニア諸都市に所領群を所有し、さらにプロヴァンスの名称不詳の諸邑 (villae) がクロタールによって、ル・マン司教ベルトラム (Bertram) 及びアウストラシア宮宰ラドの後任者フーゴ<sup>47)</sup>とともに与えられ、同宮宰職をダゴベルト1世の没年まで務めている。またラドも、 „vir illustrius” と称され、グンドラム時代のパトリキウスのレウデギゼル (Leudegisel) の所領、ブルグンドの名称不詳の諸邑を所有しているが、617年には同職はフーゴに替っている。ところでブルグンド分国のフランク人出身の宮宰ヴァルナカールは教皇グレゴリウスから „vir illustrius” と呼ばれ、テウデリヒ2世の側近にあってすでにブルニヒルデの摂政下で同職にあった。かれは614年の政変では、アウストラシア貴族とともにクロタール側につき、ブルニヒルデ摂政政権の終焉をもたらした。この功績により、かれの宮宰職はクロタール支配下にあっても継続している。かれの所領はもともと、セーヌ・エ・マルヌ (Seine-et-Marne) のガティネ (Gatinais) にあり、それを前出・ベルトラムの同地域の邑・コルムバリア (villa Columbaria) と交換している。かれは616/617年ブルグンド分国の全貴族を招集して、ボンヌィユ・s・マルヌで同分国家全議を開いている。そして617/618年には、かれとアウストラシアのラドに替ったフーゴ及びネウストリアのグンドランドら3分国の宮宰らとともにクロタールに助言して、ランゴバルト国家<sup>48)</sup>に対してフランク国家への貢納の免除と恒久和平の締結とを進言している。

ところでクロタールによる3分国の宮宰職の設置のうち、アウストラシア及びブルグンドのそれはエーヴィヒによれば、クロタール王権を支える主流とも言うべきネウストリア貴族 (antrustiones) たちによる過度の侵害に対する防壁となる使命をもっていた。しかしながら、かれによれば、614年のパリ勅令第12条にあって、高級官職の土着者任用の原則 (Indignantsprinzip) の遵守を義務付けたことは、宮宰職から上記・防壁の意義を失わせることとなった。エーヴィヒはこの事実をブルグンド分国の例に見出している。それ

はブルグンド分国貴族が宮宰職、とくにフランク人宮宰を「やっかいな中間審級」(eine lästige Zwischeninstanz)として受けとったが故に、宮宰ヴァルナカールが626/627年死亡したとき、ブルグンド分国貴族は後任者の任命をクロタルに拒否している。これはブルグンド分国におけるフランク貴族支配に対する旧ブルグンド貴族の反撓と両貴族の対立関係を暗示しており、それ故に同分国貴族は「中間審級」を経ずして、王権への直属をねがったのであり、王権側もこの機会をとらえて、同分国貴族のなかでも、ときには反王権的であり、分立主義的傾向を強める旧ブルグンド貴族とのつながりを求めている。<sup>49)</sup> エーヴィヒはこれを裏付ける事実として、ヴァルナカールの息子ゴディン(Godin)が父の死後、<sup>50)</sup>クロタルの寵愛を失っていること、旧ブルグンド貴族たち、ブルグンドファロネスが626/627年のクリシイ国家会議にあって、クロタルの要請に応じて、同王の義兄弟で、ネウストリア貴族のプロドウルフ(Brodulf)とザクセン貴族のエギyna(Aighyna)の私闘を調停することに成功したこと、この2つの事実を挙げている。このようなフランク統一王権の対ブルグンド貴族政策は次期ダゴベルト王権下でも継承され、ディジョン(Dijon)のpagus Attoariensisの大公アマルガール(Amalgar)がブルグンドのパトリキウスのウィレバード(<sup>52)</sup>Willebad)及び宮宰ヴァルナカールの義理の子で大公アルンベルト(Arnbert)とともに、ダゴベルトの命令に従ってプロドウルフを殺害している。また同王は631年、636/637年アマルガール指揮下のブルグンド勢力を用いて、対ゴード及びバス<sup>53)</sup>ク戦を行っており、そしてフランク人フラオカド(Flaochad)がダゴベルトの死後、かれの妃ナンテヒルデ(Nantechilde)の支持を受け、ブルグンドの宮宰職についたとき、上<sup>54)</sup>記・ウィレバードの抵抗を受けている。エーヴィヒは先の626/627年の宮宰任命拒否の際、ネウストリアの宮宰がブルグンドのそれを兼職したのか不明としているが、ブルグンドが、<sup>55)</sup>爾来、国王の直轄領となった可能性を指摘している。クロタルがパリに統一国家の首都を置いたことは、パリ=オーセール(Auxerre)=オータン=シャロン・s・ソーヌのローマ街道の動脈により、ブルグンドとの結びつきの強化に有利であったと言える。エーヴィヒの先の指摘が正しいとするならば、クロタル統一支配権を支える貴族勢力はネウストリア及びブルグンド両貴族であり、とくに後者に関しては旧ブルグンド貴族であった。しかし、これに対して、アウストラシア貴族がどのような位置を占めたか不明である。

623年クロタルが長子ダゴベルトによるアウストラシア下王権創設を認めたことは、クロタルとアウストラシア貴族との関係に限って言えば、R. バルーによれば、クロタルが614年のブルニヒルデに対する戦勝の恩義を同貴族に対して応えて行った「ある種の<sup>56)</sup>権力委任」(une sorte de délégation d'une autorité)であった。623年当時、アウストラ

シアの宮宰はいまだフーゴであったかどうか不明であるが、この下王権を支える貴族の指導者はピピンとアルヌルフであり、両家門はアルヌルフの息子アンゼギセル（Ansegisel）とピピンの娘ベッガ（Begga）との婚姻によって結ばれ、この年代不詳の両家の結合がクロタール2世の統一政権下のアウストラシアの新政治地図において、アウストラシアの南北両域を結ぶ強力な貴族権力的軸線を形成したのである。<sup>57)</sup>この時期に両者が初めてアウストラシア史の舞台の前面に登場して来たことは、かれらが下王権創設の譲歩をクロタールに願った同分国貴族グループの指導者に属していたのであろう。<sup>58)</sup>フレデガールの報告のなかでピピンが宮宰として登場するのは624年であるが、R. バルーはかれの宮宰職就任を615年に置いている。<sup>59)</sup>なおアルヌルフのメッツ司教叙任は614年であった。<sup>60)</sup><sup>61)</sup>

すでに指摘したように、623年のアウストラシア下王権の領域はランス、ラオン及びシャロン・s・マルヌなどシャムパーニュ地方及びアキタニアとプロヴァンスの飛領を含まない縮小された領域に限られていた。ダゴベルトが「古きアウストラシア領」の返還を求めたことにより、父子間の対立が生じたとき、625/626年同問題を討議するクリシイの国家会議にあって、メッツ司教アルヌルフを指導者とする12人のアウストラシア貴族の調停により、ダゴベルトはその返還に成功している。ダゴベルト宮廷におけるアルヌルフ及びピピンの影響力を測る象徴的事件として、624年アギロルフィンガー家（Agilolfinger）に属する有力アウストラシア宮廷貴族クロドアルド（Chrodoald）がかれらの教唆によってダゴベルトの不興をかい、クロタールの介入を排してかれを処刑した事件<sup>62)</sup>があげられる。

### 3) ダゴベルト1世の統一国家とアウストラシア貴族

629年ダゴベルトは父クロタールの死の知らせに接し、統一王権掌握のためにアウストラシアの武装勢力をひきいて、ランスからソワッソンを経由してパリに急行する途上、ブルグンド及びネウストリアの聖俗両貴族から統一王としての承認を得て、母方の叔父プロドウルフ（Brodulf）<sup>63)</sup>を擁立する動きを制することに成功した。しかしダゴベルトは弟カリベルトのために「仁慈ノ心ニ動かサレテ、賢人達カラ助言ヲ受ケテ」（tandem misericordia mutu sapientibus usus,）アキタニアの下王権をトゥールーズ（Toulouse）に設立した。<sup>64)</sup>フレデガールが伝える „misericordia” とは、クロタールが在世中、長子ダゴベルトにアウストラシア下王権を与えて、かれを自らの後継者と定め、カリベルトを冷遇したという、兄弟平等分割相続のゲルマン的原理を無視した点であろう。しかし、カリベルトのアキタニア下王権設立というダゴベルトの処置も、いまひとつのメロヴィンガーの分割相続の原則、すなわちメロヴィンガー王が嫡子であれ、庶子であれ、„rex Francorum” であり、北部ブルグンドを含むロワール河からマース河までのフランキアを分有するという「破ら

れない原則」から逸脱しており、これはエーヴィヒの言う「新しい国家観」の形成であった。<sup>65)</sup>カリベルトの下王権がアウストラシアではなく、アキタニアに置かれたのは、上記・「賢人達」のなかのアウストラシア貴族の進言によるものではなかったか。かれらは自らの王を武力の威嚇でもって統一支配の王とならしめた自負をもち、これを支える主流の座を占めることを期待したのであり、かりにかれらがカリベルトの下王権を支えることになれば、かれらの期待はついにえることを意味するであろう。事実、このことはダゴベルトが自らの „sedes principalis” をパリに移し、父クロタル統一政策を継承したことにより、かれの対アウストラシア貴族政策の転換がみられ、その結果、後述するように、ダゴベルト王権に対する失望から同貴族内部に対立が生じたことからもうかがわれよう。

629年ダゴベルトが統一王権の座に就くために、パリに赴いたとき、ピピンが他の名称不詳のアウストラシア大公たちとともにダゴベルトに同行したのは、バルーの解釈によれば、パリにあってピピンを顧問として必要としたのではなく、かれの影響がダゴベルト不在のアウストラシアで行使されるのを怖れたからであり、<sup>66)</sup>ほぼ時を同じくしてアルヌルフもメッツ司教の座と王の側近の要職を辞して、友人ロマリヒ (Romarich) によって設立されたアイルランド系修道院ルミールモン (Remiremont) に急遽隠棲しており、<sup>67)</sup>ともにアウストラシアにおける政治から身をひいている。

ダゴベルトは630年、アウストラシアに巡回視察を行い、その際、ジギベルト3世 (Sigibert III. 在位633/634-656年) の生母となるアウストラシア人ラグネトゥルデ (Ragnetruide) を妾妻として<sup>68)</sup>いる。同年、パリ宮廷内で起ったピピンと他のアウストラシア貴族団の対立は後者の教唆により、ダゴベルトにピピンを誅殺する気持を起させている。この対立の原因は何にか、フレデガールは明らかにしていないが、それはダゴベルトの対アウストラシア貴族政策の変更により、ピピンがダゴベルトに対する指導性を喪失したことへの同貴族の不満か、フレデガールが暗示するダゴベルトの「強欲」を、<sup>69)</sup>H. レーヴェが解釈するように、国庫を満たすためとするかれの王領地拡大政策そのものに対する、<sup>70)</sup>ひいてはこのかれの政策を阻止しえなかったピピンへの不満ではなかったか。フレデガールはピピンの危機の回避をかれの正義感と信仰 (justiae amor et Dei timor) によるものと述べ、しかもその直後、ダゴベルトの子ジギベルト3世がアキタニア下王カリベルトを代父とする洗礼を受けるためオレルアンに赴いた際、ピピンが同行しているのを伝えており、<sup>71)</sup>このことはピピンがダゴベルトの第1級の側近からはずされ、ジギベルト付き養育係に任じられたことを暗示している。しかもそれに続く本文で、ネウストリア貴族のエガ (Aega) がダゴベルトの最も信頼される助言者と報じているところから、パリ宮廷におけるピピンの影響力の後退は明白である。

アウストラシア貴族団の分裂と同有力両貴族アルヌルフ及びピピンの後退ののち、ダゴベルト統一王権とアウストラシア貴族との関係はどのような状況にあったのであろうか。

633/634年ダゴベルトがジギベルト3世でもって、メッツを „sedes principalis” とするアウストラシア下王権の再興をはかった契機は633年スラブ系ヴェンデ族のフランク東部地域、とくにチュウリングン侵攻であった。<sup>72)</sup> フランク人商人ザモ (Samo) を王とするヴェンデ族の自立化を制するため、ダゴベルトは631年フランク人商人迫害を口実に、アウストラシア全域から招集したフランク軍とランゴバルト及びアレマンネン両軍でもってヴェンデ族に対する遠征を行ったが、アウストラシアのフランク軍のみがベーメンの Wgost-Uhoštany で敗北し、爾後ザモはチュウリングンを制し、ソルブ人 (西スラブ) の大公デルヴァン (Deruanus dux gente Surbiorum) を支配下に置いた。フレデガールはこのアウストラシア軍の敗北を同軍の戦闘意欲の喪失 (dementacio Austrasiorum) に求め、その喪失の原因はダゴベルトが「彼レヲ憎ミ、執拗ニ苛斂誅求シタ」結果としている。<sup>73)</sup> この言葉は629年以後のダゴベルトとアウストラシア貴族との関係の陰悪化を示し、前述の王領地政策がアウストラシアに集中的に行われた可能性を裏付ける。

幼王ジギベルトの下王権を支えるアウストラシア貴族はケルン司教クニベルト (Chuni bert) 及び大公アダルギゼル (Adalgysel) <sup>74)</sup> であった。アダルギゼル家門はトリアー南部に故郷をもち、ウエブレガウ (Woevregau) からモーゼル河北岸のアルデンヌの森及びトンゲルン (Tongern) 地域に所領をもち、ヴェルダン司教座に寄進されるトーレイ (Tholey) 修道院の建設家門グループに属しており、<sup>75)</sup> 注目すべきはこのグループにはアルヌルフのあとのメッツ司教職をついだゲエリクス (Goericus) も属していた。<sup>76)</sup> またクニベルトも同じくモーゼル河中流域の貴族家門に属し、ダゴベルト宮廷で教育を受けたのち、聖界に入り、トリアーの首席助祭 (archidiaconus) となり、626/627年以前にダゴベルトによってケルン司教に任ぜられた。<sup>77)</sup> フレデガールによれば、638年ダゴベルトの死後、クニベルトがピピンと一致してジギベルトを分国王として支持し、両者は同王のためにダゴベルトの遺産を母后ナンテヒルデ (Nantechilde) 及びネウストリア＝ブルグンド分国王クロードウヒ2世 (Chlodwig II. 在位638－657年) と平等分割することに成功している。<sup>78)</sup> クニベルトのケルン司教叙任が626/627年以前であるならば、その時期はピピン及びアルヌルフがダゴベルトの宮廷で勢力をもっていた時期にあたり、とくにピピンとクニベルトとの友誼は638年以前から長きにわたって結ばれていたことから (sicut et prius amicitiae cultum in inuicem conlocati fuerunt)、<sup>79)</sup> その叙任がピピニーデン＝アルヌルフィンガーの意志とする北村氏の見解は正鵠をえたものと言えよう。<sup>80)</sup> しかしジギベルト下王権におけるピピンの位置づけについては、フレデガールの沈黙によって不明であるが、上記・ジギベル

ト擁立の際、ピピンを宮宰とフレデガールが記述しているところから、ジギベルトの養育係ピピンがパリ宮廷から幼王に同行して下王権の宮宰としてメッツ宮廷に移ったと解される。F. バイヤールはダゴベルトが「ジギベルトニメッツノ座ヲ所有スルコトヲ許シタ」(sedemque ei Mettis habere permisit) というフレデガールの文言の解釈として、ダゴベルトがジギベルトの保護を摂政のクニベルト及びアダルギゼル両者にではなく、メッツに滞在するピピンに託したとし、リプアリア法典は上記2人の摂政にダゴベルトから与えられた保証であったと述べている。<sup>81)</sup> このバイヤール説を批判して、エーヴィヒは上記のフレデガールの文言を単にジギベルトの居住地をメッツに定めたことを述べたにすぎないとし、またジギベルトがメッツでピピンの保護下に置かれていたとする仮説も、もしそれが正しいとするならば、それはクニベルト及びアダルギゼル2人の摂政の自立化への志向を防ぐ処置であったとする。だがエーヴィヒも指摘するように、ジギベルトの当時の養育者はオットー<sup>82)</sup> (Otto) であり、かれはヴァイセンブルグ修道院建設家門に属し、ピピニーデンの対立者、ダゴベルトの家令 (domesticus) のウロ (Uro) の子であり、<sup>83)</sup> このことからピピンはアウストラシア下王権からも隔離され、ネウストリア宮廷に「危険人物」、としてダゴベルトの監視のもとに638年まで留め置かれた可能性も残される。

#### 注

- 1) 拙稿「Gunthramnus」 111-112頁。; Greg., HF. IX, 20. (2巻328-336頁)
- 2) F. Irsigler, Untersuchungen zur Geschichte des frühfränkischen Adels, Bonn 1969, S. 162.
- 3) 北村忠夫「7・8世紀転換期における、初期カロリナー権力の東進—帝国貴族 (Reichsaristokratie) 成立史序説—」久保正幡編「中世の自由と国家 下」東京昭和44年。85頁。; Greg., HF. IX, 8. (2巻300頁); IX, g. (2巻302頁)。
- 4) Greg., HF. V, 46. (1巻472頁)。
- 5) Greg., HF. VI, 3. (2巻8頁)。; cf. Greg., HF. IX, 19. (2巻470頁)。
- 6) Greg., HF. VI, 4. (2巻8-9頁)。; IX, 12. (2巻312-313頁)。; Dalton. The History of the Franks by Gregory of Tours, Oxford 1927, II, p. 532.; R. Buchner, Gregor von Tours, Zehn Bücher Geschichten, Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, Darmstadt 1967, Bd. I, S. 262, N. 1.
- 7) Greg., HF. VI, 3. (2巻9頁)。
- 8) Greg., HF. VI, 24.
- 9) Buchner, op. cit., II, S. 42f., N. 1.
- 10) Greg., HF. VII, 22. (2巻242-243頁)。; Dalton, op. cit., II, p. 577.
- 11) Greg., HF. IX, 9-11, (2巻302-315頁)。
- 12) Greg., HF. X, 19, (2巻474-475頁)。
- 13) Greg., HF. IX, 38, (2巻368-372頁)。
- 14) Greg., HF. IX, 12, (2巻314頁)。
- 15) Greg., HF. IX, 11 (2巻310-311頁)。
- 16) Greg., HF. IX, 23 (2巻344頁)。



- 17) 拙稿「Gunthramnus」112頁参照。
- 18) H. Grahn-Hoek, Die fränkische Oberschicht im 6. Jahrhundert, Studien zu ihrer rechtlichen und politischen Stellung, Vorträge u. Forschungen Sonderband 21, Sigmaringen 1976, S. 261f.
- 19) Grahn-Hoek, op. cit., S. 262, N. 628.
- 20) Irsigler, op. cit., S. 163.
- 21) 石川 操「初期フランク王国における貴族と王権」 青山経済論集 第25巻、2号、昭和48年。参照。
- 22) Grahn-Hoek, op. cit., S. 274.
- 23) Irsigler, op. cit., S. 163.
- 24) 坂田・前掲書 151頁
- 25) Fustel de-Coulange, Histoire des Institutions politiques de l'ancienne France, Paris 1888, III, p. 609.
- 26) A. M. Drabek, Der Merowingerertrag von Andelot aus dem Jahr 587, MIOG, S. 37.
- 27) Greg., HF. VI, 26 (2巻56頁)。
- 28) H. Löwe, Deutschland im fränkischen Reich, Gebhardt, Handbuch der Deutschen Geschichte, 9. Auflage, Stuttgart 1970, S. 126.
- 29) Ewig, Teilreiche I, S. 170.
- 30) 拙稿「コルムバヌス修道院運動—メロヴィンガー・フランクの政治史的・教会史的転換期に関する一考察」 名古屋大学文学部研究論集 第53巻 昭和45年、26—27頁。
- 31) ボルドー司教ベルトラム (Bertram) Greg., HF. VII, 31 (2巻164—168頁)。  
 サント司教パッラディウス (Polladius) VII, 2, (2巻207頁)。パザス司教オレステス (Orestes),  
 カオール司教ウルジシヌス (Ursicinus) VII, 20, (2巻238頁)。ダックス司教ファウスティアヌス  
 (Faustianus) ibid. VII, 2, (2巻207頁)。元トゥルーズ大公デジデリウス (Desiderius) VII, 9,  
 (2巻128頁)。  
 元サント伯ヴァッド (Waddo) VII, 27, (2巻156頁)。以上西南ガリアのネウストリア貴族団の  
 メンバーの名があげられる。
- 32) Ewig, Teilreiche I, S. 66.
- 33) Fred., IV, 40, p. 33.; Ewig, Teilreiche I, S. 67.
- 34) Fred., IV, 38, p. 31.
- 35) Ewig, Trier im Merowingerreich, Civitas, Stadt, Bistum, Trier 1954, S. 114.
- 36) Sprandel, op. cit., S. 37.
- 37) H. Ebling, Prosopographie der Amtsträger des Merowingerreiches, von Chlothar II. (613) bis  
 Karl Martell (741), Beihefte der Francia 2 München 1974, XXII, S. 45.
- 38) ibid., CCLXI, S. 210f.
- 39) ibid., CCLXXIX, S. 215.
- 40) Fred., IV, 41, p. 33.
- 41) Fred., IV, 40, p. 32.
- 42) Sprandel, op. cit., S. 37.
- 43) Ewig, Teilreiche I, S. 163f.
- 44) Fred., IV, 42, p. 35.
- 45) Ebling, Prosop., CXCVI, S. 165; Liber Historiae Francorum, 40, Ausgewählte Quellen zur Deutschen  
 Geschichte des Mittelalters Bd. IV a, Darmstadt 1982, S. 360.
- 46) Ebling, Prosop., CCLVII, S. 201; Fred., IV, 42, p. 35.
- 47) ibid., CXXXVII, S. 122.

- 48) Fred., IV, 45, p. 38.
- 49) Ewig, Teilreiche II, S. 193.
- 50) Fred., IV, 54, p. 44f.
- 51) Fred., IV, 55, p. 46.
- 52) Ebling, Prosop., CCCXI, S. 238.
- 53) Fred., IV, 73, p. 62., 78, p. 65.
- 54) Fred., IV, 89, p. 75f.; 90, p. 76.
- 55) Ewig, Teilreiche II, S. 193.
- 56) Barroux, op. cit., p. 112.
- 57) 北村前掲書 86頁
- 58) Ewig, Teilreiche II, S. 194.
- 59) Fred., IV, 52, p. 42.
- 60) Barroux, op. cit., p. 114.
- 61) H. H. Anton, Arnulfinger, Arnulf von Metz, Hoops, Reallexikon Germ., I, S. 435f.
- 62) Fred., IV, 52, p. 43.
- 63) Fred., IV, 56, p. 47.
- 64) ibid.
- 65) Ewig, Das Merowingische Frankreich, S. 36.
- 66) Barroux, op. cit., p. 114.; Fred., IV, 85, p. 71. このフレデガールの報告から、パリ宮廷にピピンのほか、アウストラシアの大公たちがいたことがうかがえる。
- 67) Anton, op. cit., S. 360.
- 68) Fred., IV, 59, p. 50.
- 69) Löwe, op. cit., S. 129.
- 70) Fred., IV, 61, p. 51.
- 71) Fred., IV, 62, p. 51.
- 72) Fred., IV, 75, p. 63.
- 73) Fred., IV, 68, p. 58.
- 74) Fred., IV, 75, p. 63.
- 75) Ewig, Trier im Merowingerreich, S. 123; Ebling, Prosop. V, S. 30f.; 北村前掲書92頁。
- 76) L. Duchesne, Fastes Épiscopaux de l'ancienne Gaule, Paris 1915, III, p. 56.
- 77) ibid., III, p. 179. クニベルトは626/627年 Clichy 教会会議に出席している。
- 78) Fred., IV, 85, p. 71.
- 79) ibid.
- 80) 北村前掲書89頁。
- 81) F. Beyerle, Das Gesetzbuch Ribuariens Volksrechtliche Studien III, ZRG, GA 55(1935) S. 10f. (Ewig, Teilreiche II, S. 119)
- 82) Ebling, Prosop. LIII, S. 66.
- 83) ibid, CCXCIV, S. 225.

## むすび

614年から623年に至るまでのクロタール2世統一王権下のアウストラシア領域は、おそらく旧ローマ軍管区のデンテリヌスを除いて、アンデロー協約の規定が基礎となっていた

と想定されるが、明確には確定しえない。同統一王権下では、宮宰職がそのままひきつづき設置され、3分国家体制が維持されたが、各分国家の政治的自立性が失われ、またクロタールの „sedes principalis” がパリに設定されたことによって、パリのもつ地政学的な位置から統一王権が東部のアウストラシアよりも、南部のブルグンド及び西南部のアキタニアとの繋りを強めていたのであろう。この間、クロタール統一王権とその成立に寄与したアウストラシア貴族との関係についての明確な絵図は得られない。

623年クロタール統一王権下において、ダゴベルト1世のアウストラシア下王権が成立したとき、アウストラシア領はシャムパーニュ地方とヴェルダンがネウストリア領に併合された「縮小化した」領域であった。このシャムパーニュとヴェルダンの喪失はアウストラシアにとって領域的な縮小化ばかりでなく、同下王権の „sedes principalis” のメッツに対する戦略拠点をクロタールに扼され、政治的自立性の侵害となったことを意味した。625/626年クリシイ国家会議においてダゴベルトによる上述地域の返還要求が「フランク貴族団」の仲介、すなわちアウストラシア貴族側からの働きかけがあったことが十分に想定される。ダゴベルトの下王権のもとで政治自立性を志向したアウストラシア貴族はクロタール統一王権成立に寄与した北部アウストラシア貴族のアルヌルフと南部のそののピピンであった。

ダゴベルトは629年クロタールの統一王権を継承し、自らの „sedes principalis” をメッツからパリに移したことによって、ブルグンド及びアキタニアとの関係を強め、アウストラシア軽視の政策に転換した。ダゴベルトは統一王権強化をはかるために、アウストラシア貴族勢力の削減を狙ってその改組を行い、またジギベルト3世のアウストラシア下王権設立の際、それにはかつての「最も縮小された」領域を認めたにすぎなかった。同下王国の設立は同貴族の要求を満たすものというよりは、対ウエンデ政策を意図したフランク東部地域の安全確保とライン河以東、とくにチウエリゲン及びレチェンに対する領域拡大を図るためであった。それ故に同下王権はダゴベルトの統一王国における辺境下王権の地位にとどまったのであり、ライン河右岸の上記の広大な領域を自領のなかに加えたとしても、シャムパーニュ地方及びヴェルダンという、王領地が高い密度で存在するフランキアの中央部の領域の所有からはずされたことはアウストラシア勢力の後退を示している。

以上のことから、614年から638年までのクロタール及びダゴベルト統一王権下におけるアウストラシア貴族の位置づけは、パリ勅令第12条及び第19条についての「通説」的解釈のように、王権が権力の譲歩を余儀なくせざるほどのものであったとは考えられない。